



平成26年度水稻生育診断予測事業速報No. 2

(早植栽培6月9日調査結果)

平成26年6月11日

栃木県農政部経営技術課

 **平年より茎数が多く、草丈も長い。早急に間断かん水に入り、6月下旬に中干しを行う。**
 **イネ縞葉枯病の防除を徹底する。いもち病の発生に注意する。**

1 気象概況《5月下旬～6月8日(宇都宮)》

5月下旬～6月第1半旬までの平均気温は平年より2.2～4.0℃高く、日照時間は118～130%と高温・多照で経過した。降水量は平年比94～21%と、平年よりも少なく推移した。しかし、6月5日の梅雨入り(平年比3日、昨年比5日早い)以降は、平年よりも平均気温は1.3℃低く、寡照・多雨となった(平年比:日照時間1.0%、降水量238%)。

2 調査結果《早植栽培、品種:コシヒカリ》

(1) 16か所平均(表1)

草丈は長く(平年比118%)、茎数は多く(121%)、葉齢は0.5葉多く、葉色は平年並。葉齢から判断して、生育は2日程度進んでいると考えられる。生育診断値(葉色×茎数)は平年比122%と大きい。

(2) 分施肥体系の生育(10か所)(表1、図1～2)

ア 草丈は38.9cmで平年比115%と長く、茎数は480本/m²で平年比112%と多い。

イ 葉齢は8.3葉で平年より0.4葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年より2日程度進んでいる。なお、大田原市、真岡市、小山市では6～7日程度進んでいる。葉色は4.8で平年並。

ウ 生育診断値(葉色×茎数)は2,317で平年比112%と大きい。

エ 発生程度は低いが、イネミズヅウムシが5か所、イネドロオイムシは3か所で確認されている。イネヒメハモグリバエの発生は確認されていない。

(3) 全量基肥体系の生育(6か所)(表1、図1～2)

ア 草丈は39.6cmで平年比123%と長く、茎数は436本/m²で平年比141%と多い。

イ 葉齢は8.4で平年並より0.8葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年より4日程度進んでいる。葉色は4.7で平年より0.1濃い。

ウ 生育診断値（葉色×莖数）は2,036で平年比145%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所、イネドロオイムシは3か所で確認されている。
芳賀町でイネドロオイムシの発生程度が高い。

(4) 地温の推移【農試調査】（図3-1～3-2）

前回調査（5月26日）以降、気温は平年よりも高めに推移したことから、地温も平年より高く経過した。しかし、6月5日の梅雨入り以降調査日までは、気温、地温ともに平年より低くなった。

3 技術対策

気象庁地球環境・海洋部発表（26年6月5日）の「関東甲信地方 1か月予報」（6月7日～7月6日の天候見通し）では“平年と同様の天候”が予想されている。さらに、気象庁地球環境・海洋部発表（26年6月10日）の「エルニーニョ監視速報（No.261）」では“エルニーニョ現象の発生に近づき、夏には5年ぶりにエルニーニョ現象が発生し、秋にかけて続く可能性が高い”と予想されている。一般的に、夏にエルニーニョ現象が発生すると、日本付近では太平洋高気圧の張り出しが弱くなり、梅雨明けが遅く、冷夏・多雨・日照不足になる傾向があるとされている。

天候不順に対応できるよう、以下の点に以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

前回の調査（5月26日）以降、県内全般に高温・多照傾向であったことから、葉色はほぼ平年並であるが、草丈、莖数ともに前回より平年との差が大きくなり、生育診断値（葉色×莖数）は、分施、全量基肥とも平年を上回っている。

初期生育が旺盛で過繁茂になると籾数過剰になり、登熟低下、白未熟粒の発生、食味低下を招きやすい。特に、天候不順時は同化産物の生成・転流が滞り、登熟低下等が助長される可能性が高まる。さらに、分げつが多くて莖が細くなると、蓄積される同化産物の量が減少し、登熟期に穂へ転流する量が不足して登熟低下となる可能性もある。また、草丈が長いことから、節間伸長期の葉色が濃い場合は、下位節間が伸びて倒伏が多くなることも考えられる。

前号で平年より早め（6月第1半旬）からの間断かん水を推奨したが、まだ実施していない場合は早急に間断かん水を行う。さらに、葉色が平年よりも濃い場合は最高分げつ期頃（6月下旬）に中干しを行い、過剰分げつの抑制、充実した莖の確保、受光態勢の改善、下位節間の伸長抑制に努める。また、今年は葉色が平年並の場合も軽めの中干し（1週間程度）を行う。

中干し終了後は生育が落ち込まないように、規則的な間断かん水を継続する。湛水状態にすると、酸化状態にあった根が、急激な酸素不足により根腐れする可能性がある

ので注意する。

なお、生育診断値が指標値（表 2）を下回っている場合や浅耕田、地力の低いほ場では、水管理は間断かん水を基本に行う。

また、夏にエルニーニョ現象が発生せず、近年同様に暑くなることも考えられるが、過剰生育を抑える上記の対策は、高温障害への備えにもなる。

(2) 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。

天候不順時は稲体の窒素濃度が高くなりやすく、拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要がある。特に、分けつ盛期以降は加里濃度が低くなるので、出穂前40～45日頃に積極的に加里（成分で4～5 kg/10a）を追肥する。

(3) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（26年6月2日）の「植物防疫ニュース（速報No. 4）」によると、県中南部の保毒虫率が過去2年に比較して高まっている。当該地域では、ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用+本田での薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

農業環境指導センター発表（26年5月23日）の「平成26年度 病害虫発生予報第2報」によると、葉いもちの発生予想は「やや少」であるが、BLASTAM (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2014.htm>) による葉いもち感染好適条件判定結果では、6月に入って準感染好適条件が出現し始めている。天候不順時は、稲の軟弱生育といもち病の発病好適条件が重なり、発生が拡大して減収の危険性が高まる。間断かん水により稲体の窒素濃度を下げて稲体を硬くし、いもち病に対する抵抗性を高めるとともに、特に常発地域、箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）が効果的である。また、いもち病の発生源となり得る取置き苗は早急に処分する。

ウ イネドロオイムシ

農業環境指導センター発表（26年6月5日）の「植物防疫ニュース（速報No. 5）」によると、常発地では幼虫が多発し、食害程度の高い水田が見られる。産卵盛期～ふ化初期の6月上旬～中旬が防除適期になっているので、卵塊や幼虫の発生が多く確認できた場合は、適切な防除を実施する。なお、発生が少ない場合でも、雲雨天が続くと多発する恐れがあるので、今後の発生状況に注意する。

※ 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)

(4) 低温への備え（深水管理が可能な畦畔の準備）

稲が低温に弱い時期は、幼穂形成期（出穂前25日頃、早植コシヒカリで7月上旬）～減数分裂期（出穂前14～7日頃、早植コシヒカリで7月中～下旬）である。特に、減数分裂期に最低気温が17℃を下回ると不稔が発生し、減収の危険性が高まる。さらに、幼穂形成期、減数分裂期の両時期に低温に遭遇すると被害が助長される。

このような場合は、幼穂形成期から減数分裂期にかけて深水管理を行い、水の保温効果により幼穂を低温から保護することが基本技術である。そのためには、畦畔を深水管理が可能な状態にしておく必要がある。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬使用のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！